

2024年3月17日

四旬節第5主日

菊地功大司教 メッセージ

「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」

いったい、わたしたち人間は何のためにいのちを生きるのかを、あらためて考えさせられる、主イエスの言葉です。

わたしたちは、いのちは神から与えられた尊い賜物であると信じています。この賜物であるいのちを、わたしたちは人生の中でどのように生きるのかが問われています。

一粒のままで終わる人生の道を歩むのか、多くの実を結ぶ人生を歩むのか。「地に落ちて死ぬ」とは、具体的にどういう人生を現しているのでしょうか。

自分の周りに壁を打ち立て、まるで自分だけを守るようにして隣人の必要を顧みずに生きる姿勢を、教皇フランシスコは、教皇就任直後の2013年に地中海に浮かぶランペドゥーザ島に押し寄せる難民たちを訪ねたときに、「虚しく輝くシャボン玉」の中に閉じこもっていると表現しました。その上で教皇は、シャボン玉の外にある叫びに耳を塞いでいる姿勢が世界中に蔓延している状況を、「無関心のグローバル化」と呼び、殻を打ち破って、弱い立場にある人の叫びに耳を傾けるようにと呼びかけられました。結局、わたしたちが自分のいのちだけを守ろうとするとき、または自分に近い人たちのいのちだけを守ろうとするとき、その麦の種は、実を結ぶことなく朽ちていくことでしょう。しかし自分の欲望をうち捨て、虚しい虚飾の壁を打ち破り、そのシャボン玉の外へと目と耳を向けたときに、いまの自分のあり方に終止符を打って、多くの人に生きる希望を生み出す実りとなることが可能となります。

しかしその人生は、決して楽な歩みを保証するものではありません。主御自身の人生の歩みを見れば、それは明らかです。困難の連続です。

パウロはヘブライ人への手紙で、「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして完全なものとなられた」と記しています。すなわち、神の目にあって完全なものとなるためには、自らの立場から降り立ち、苦しみを耐え忍びながら、神の意志に従順であることが絶対条件であると、パウロは強調します。

わたしたちの信仰の先達には、この日本において、迫害の時代に、いのちの尊厳を守り、互いに助け合うことにいのちがけで取り組み、その苦しみの人生を通じて、神が求められる生き方を証しした殉教者たちが多数おられます。

殉教者たちの、いのちを賭したあかしの勇気ある決断は、突然なされたわけでも、思い詰めての性急な判断でもありません。その決断は、キリスト者が、生涯をかけて信仰を真摯に生き抜いた結果としてある決断です。すべてをうち捨てて、神から与えられたいのちをよりふさわしく従順に生きるものとしての使命を生き抜いた結果としての決断です。いのちを生きる意味を突き詰め、困難に直面しながら証しを続けてきたからこそ、最後の最後で、殉教への決断につながったのです。わたしたちは、いまのように自分を中心にした生き方をうち捨て、他者に希望をもたらすものでありたいと思います。